Kaori Nakano

中野香織

ファッション歳時記 95

機能的でも喜べない「ウォーコア」

地球上のいたるところで戦争やテロ、暴力事件が起きています。イギリスではナイフによる殺傷事件が絶えず、アメリカでは銃の乱射事件が繰り返され、日本でもテロのような非道な事件が続きます。人間の憎しみが生む事件ばかりではなく、自然災害も増えています。大地震もいつどこで起きるかわかりません。

このような殺伐とした状況を受けて、新しい「ファッションアイテム」が続々、提案されています。中東の兵士がかぶっているようなフェイスマスク。弾丸やナイフを通さない繊維で作られたベスト。身体にストラップを巻いてくくりつけるハーネスバッグ。太腿にガンホルダーのようにつけるバッグ。収納ポケットやフックがついたズボン。ぬかるみでも荒野でも歩き続けられるブーツ。テントになるジャケット。

そこまでハードな武装ではなくても、スーツやドレスにスニーカーを合わせることは普通になりつつあるし、パーティーでも動きやすいジャージーのズボンという姿を見かけるようになりました。いつなにが襲ってきても衣服や靴に妨げられることなく避難できるスタイルが、現在、支持を集めているのです。

そんなトレンドを表現する言葉として、「ウォーコア（Warcore）」という新語も生まれました。2014年からの一大トレンドだったノームコア（Normcore＝筋金入りの普通）を受けて生まれた言葉で、戦争（war）に備えるかのような街なかでの日常的武装をさします。外敵から身を守り、苛酷な状況でサバイバルを目指すことが衣服を着る第一目的になった時代を、皮肉にも映し出すトレンドです。

ミリタリー、すなわち軍服は常にファッションのインスピレーション源であり続けてきました。トレンチコートが第一次世界大戦の塹壕（トレンチ）で着られた軍服であることは広く知られていますが、スーツの襟も、軍服由来です。詰襟を平時に折り返した形がスーツの襟です。だからこそ、軍服の第一ボタンの名残りとして、スーツの左襟にボタンホールが残っています（結果として、社章をつけるための穴になったりしていますが）。

90年代の湾岸戦争のときには、兵士がつけていたドッグタグが流行しました。名前や所属がわかるタグが2枚ついたネックレスで、戦死したとき、そのうちの1枚を家族に送るための兵士の身分証です。しかし、街中ではファッションアイテムとして流行しました。

つまり、従来の「ミリタリー」は、戦場という文脈から切り離された形で、平和な街のなかで着用されていました。機能性のあるデザインが人気を博したとしても、戦場ではない平和な場所で着用するからこそクールだったのです。今回のウォーコアはそうではありません。今日、必要となってもおかしくはないリアリティを感じさせます。「洒落」になっていないのです。ウォーコアの流行は、すでに私たちは戦場を生きているのかもしれないことを示唆して、少し空恐ろしくなります。

なかの かおり
1962年生まれ。富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆をおこなうほか、昭和女